

EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(1)(HP 収載)

—由来と準備作業—

1. 始めに

種々の EQ カーブ対応のフォノステージは持ち合わせていませんが、トーンコントロールのあるプリアンプを有する場合、個々の EQ カーブへ疑似的に対応する方法を検討します。

2. 由来と目的

種々の EQ カーブによりカッティングされたレーベルの盤の再生については、オーディオ資料室とオーディオ論壇においてアナログシステムの変遷と EQ 特性、EQ 特性の対応の経過およびオーディオ再生上のやっかいな問題—その 1 として論じてきました。

EQ カーブは、RIAA のみと信じ込んでいた時代には、違和感を覚えたレーベル毎にプリアンプのトーンコントロールを調整したり、JBL4350A 導入後は、チャンネルデバイダーのレベル調整や JBL4350A のネットワークのレベル調整、さらにはグラフィックイコライザーの導入など、再生音のバランスを採るのに腐心してきました。その後、iFi の iPhono を導入し、RIAA の他に DECCA カーブと Columbia カーブへの対応を行ってきました。

大きな転機は、吉田苑主催の ZANDEN のデモを契機として、5 種のイコライザーカーブと位相反転および 3 種の第 4 時定数対応のフォノイコライザー Model 120 の導入に至り、レーベル毎、盤毎の最適な条件設定を現在も継続実施しています。

今回の目的は、種々のイコライザーカーブ対応のフォノステージはないが、トーンコントロールのあるプリアンプを有する場合、個々の EQ カーブへの疑似的な対応手段を検討することにあります。

3. 準備作業

必要なことは、トーンコントロールのあるプリアンプを準備することで、必ずしもベストの選択ではありませんが、これしかないということで、古いモデルの Leak Point 1 を使ってみます。

添付の写真のように、低音の Bass と高音の Treble のコントロールが可能です。



ライン入力としては、Tuner がありますので、これへの ZANDEN Model 120 から入力が可能です。



配線は以下のように Leak Point1 をラインアンプとして介在させ、トーンコントロール機能を活用します。

LINN LP-12→ZANDEN Model120→Leak Point 1(ライン入力)→TruPhase

4. 方針と手順

ZANDEN の資料によれば、Turn over と Roll off 特性は下記のようになっています。

Table A EQ Curve 特性 (Turn over & Roll off)

EQ Curve	Turn over Freq. Low(Hz)	Roll off Freq. High(KHz)
DECCA	125/500	1.59/-16dB(at10KHz)
Columbia	100/500	1.59/-16dB(at10KHz)
RIAA	50/500	2.12/-13.7dB(at10KHz)
TELDEC	50/350	1.59/-16dB(at10KHz)
EMI	75/500	1.59/-16dB(at10KHz)

これらの特性から RIAA 以外のイコライザー特性の盤を RIAA で再生した時、本来のイコライザー特性を活かすためには、上記の Turn over と Roll off 特性の比較から、次のようなストラテジーが考えられます。

Table B RIAAから各EQカーブに近づけるトーンコントロールの調整

DECCA	トーンコントロールのHigh、Lowとも上げる。
Columbia	トーンコントロールのHigh、Lowとも上げる。
TELDEC	トーンコントロールのHighを上げる。
EMI	トーンコントロールのHighを上げ、Lowを少し上げる。

手順としては、まず Leak Point1 のトーンコントロールを中心位置にして ZANDEN Model 120 の本来のイコライザーカーブで聴いておき、ついで RIAA で再生して本来のイコライザーカーブの音に近づけるよう Leak Point1 のトーンコントロールを調整するという手順になります。

以上